

## 5-1 検証のはじめに

### 海外の手法を日本市場で検証

本章では、パンローリングから1999年に発行され、今もなおプロ、アマを問わず多くのトレーダーから支持されている『魔術師リンダ・ラリーの短期売買入門』『ラリー・ウィリアムズの短期売買法』から代表的な短期売買システムを取り上げ、日本市場での成績を検証します。

本来、売買法の検証は、その売買法を実際に使おうとする投資家自身で実行することが望まれます。しかし、本として出版され、そこに記載されている公知の手法に対して、多くの人が同様の検証をするのは、時間的にとても、もったいないことです。また、1つのシステムを多くの市場に対して評価する作業は、とても時間がかかり、骨がおれます。

本章の目的は、読者のみなさんをこうした作業から解放し、「きっかけ」を提示することです。本章の結果に基づいて、成績の良い手法をそのまま実行するのも一案です。もちろん、各種パラメータの調整、読者自身の改良などで、自分自身で納得できるカタチで実際の投資に生かすことが最善といえるでしょう。

### カーブフィッティングとは

ここでは紙幅の都合から、著者の推奨するパラメータのみを検証しています。さらなる研究のための売買システム構築、売買法の検証方法については、櫻井元氏が執筆した第4章の「売買システムの作り方」を参照ください。

検証では「カーブフィッティング」に十分注意する必要があります。カーブフィッティングとは、知らず知らずのうちにルールをたくさん導入し、自分にとって都合の良いデータを集めてしまうことをいいます。これをしてしまうと、その成績が将来再現する可能性は必然的に低くなるのです。

システム構築をいろいろやり出すと、カーブフィッティングとの戦いになります。良いルールの追加はカーブフィッティングと紙一重といっても過言ではないでしょう。

**結果の数字に一喜一憂するよりも、なぜそのような結果になるのか、というシステムの論理を理解し、納得することが重要だと筆者は考えます。**

本章で検証する手法は、もともと単純なルールを持つものばかりです。したがって、このようなカーブフィッティングの危険性は、小さいといえます。

### 検証に使用したデータとその理由

図表5.1は検証の対象銘柄とそのデータ期間です。

図表5.1 検証銘柄

銘柄	取引所	データ開始	データ終了	呼値単位	倍率
金	TOCOM	1994/1/4	2007/5/31	1円	1,000
銀	TOCOM	1994/1/4	2007/5/31	0.1円	6,000 <sup>*1</sup>
白金	TOCOM	1994/1/4	2007/5/31	1円	500
ガソリン	TOCOM	1999/7/5	2007/5/31	10円	50
灯油	TOCOM	1999/7/5	2007/5/31	10円	50
原油	TOCOM	2001/9/10	2007/5/31	10円	50
ゴム	TOCOM	2005/1/4	2007/5/31	0.1円	5,000
アラビカ	TGE	1998/6/16	2007/5/31	10円	50
トウモロコシ	TGE	1994/1/4	2007/5/31	10円	100 <sup>*2</sup>
大豆	TGE	1994/1/4	2007/5/31	10円	50
日経225	OSE	1994/1/4	2007/5/31	10円	1,000
TOPIX	TSE	1994/1/4	2007/5/31	0.5ポイント	10,000
日本国債	TSE	1994/1/4	2007/5/31	0.01円	1,000,000
日本円	CME	1994/1/3	2007/5/31	0.0001セント	12,500,000
ユーロ通貨	CME	1994/1/3	2007/5/31	0.01セント	125,000
ドル指数	NYBOT	1994/1/3	2007/5/31	1セント	1,000
新日鐵	TSE	2000/1/4	2007/5/31		1,000
ソフトバンク	TSE	2000/1/4	2007/5/31		100

\*1 2007/10 限以降は 3000 倍 \*2 2008/5 限以降は 50 倍

TOCOM = 東京工業品取引所 TGE = 東京穀物商品取引所 OSE = 大阪証券取引所  
TSE = 東京証券取引所 CME = シカゴ・マーカンタイル取引所  
NYBOT = ニューヨーク・ボード・オブ・トレード

先物銘柄に関しては、実際の売買に重要な流動性をふまえたうえで、できるだけ広範囲を取り入れました。また個別株式については代表的銘柄である新日鐵（5401）、ソフトバンク（9984）を取り上げました。

検証に使用した先物のデータは、サヤ修正を施したつなぎ足で、最も出来高の多い限月をつないだものです。商品先物では、期先限月のつなぎ足に近いものになり、日経平均先物（225先物）、日本国債先物（JGB先物）、日本円先物、ユーロ通貨先物、ドル指数先物に関しては、期近限月のつなぎ足に近いものとなります。その理由は、流動性、信頼性が最も高い価格系列を用いるためです。

個別株式については、配当修正なしの分割修正をしたデータを用いました。

損益の評価は、取引所表示価格の値幅で行います。ただし、実際の損益を計算するには、売買する銘柄のそれぞれの倍率を掛け、手数料と後述する「スリッページ」を差し引く必要があります。ここでは、手数料とスリッページの分が含まれていません。したがって、この結果は現実よりも良く表示されていますので、注意が必要です。

なお、日本円先物はCME（シカゴ・マーカンタイル取引所）の立会時間のデータを対象にしており、夜間市場のデータは含めていません。1枚の売買単位が1250万円で、価格が1呼値（ティック）変動すると12.5ドルの損益が生じます。

ユーロ通貨先物もCMEの立会時間を対象にしており、1枚の売買単位が125,000ユーロで、価格が1呼値変動すると12.5ドルの損益が発生します。

ドル指数先物はNYBOT（ニューヨーク・ボード・オブ・トレード）に上場しています。指数値×1,000ドルが1枚当たりの売買単位となっており、1呼値の変動が10ドルの損益に相当します。

## スリッページについて

本章で紹介する手法は、逆指値で建玉します。検証結果は逆指値どおりに約定できたと仮定していますが、現実の売買では多くの場合、指値よりも自分にとって不利な価格で約定します。この価格のズレが「スリッページ」です。その程度はそのときの相場や建玉枚数に大きく依存します。

一般に売買の枚数が多くなるほど、あるいは相場の値動きが速いほどスリッページは大きくなります。場節取引の商品先物の場合、このズレがとても大きなものになり得ます。したがって、本章の検証結果は参考程度に考えてください。ウップス戦略の節足による検証結果は第3章に掲載されていますので、比較してもらえればと思います。

## 成績評価の仕方

売買成績には、サインごとに1枚ずつトレードした場合の売り買いを通した総合評価と、売り買い別の評価を準備しました。仕切り戦術は、ある日の大引けでの執行です。当日大引けから7日目大引けまでのなかで、最良と思われる2つを採用しました。

では、いよいよこれから、戦略の概要、売買ルール、チャートギャラリーによる表示法、成績、まとめを順に紹介していきます。

最後に表に使った用語で主なものをまとめました。ほかの不明な用語については「付録B：相場用語集」も参照してみてください。

### 純利益

すべてのトレードを合計した利益。マイナスは損失を意味する。

### 最大ドローダウン

損益曲線の、最高地点から引かされた金額の最大値。

### シャープレシオ

月次収益の平均を、標準偏差で割ったもの。損益曲線の平滑さを評価するのに使える指標で、0.5以上が良いシステムといわれている。

### 平均利益

純利益をトレード数で割った値で、1回のトレードで得られる利益の期待値。

### プロフィットレシオ

損益率のこと。勝ちトレードの平均利益を負けトレードの平均損失で割った絶対値。